

高岡ロータリークラブ

会長／牧野 明 幹事／坪田 伊歩

例会日：木曜日 12:30～13:30 創立：1951/11/15

2025/11/6

No.17



チャーターナイト：1952/4/15 創立順位：No.68

司会 安田 会場監督 点鐘 牧野 会長

国歌斉唱

ロータリーの目的／四つのテスト

ゲスト

■高岡ワイン俱楽部オーナー 石井大地様

■米山奨学生 マリク、アイシャさん

会長挨拶／報告

■誕生日祝

島 尚之 さん (11/8・57才)

■皆出席表彰

永田 義邦 さん (44年)

藤田 益一 さん (32年)

加藤 一博 さん (29年)

板谷 聰 さん (21年)

林 成興 さん (4年)

二上 利博 さん (1年)

■米山奨学会より感謝状披露

2024-25年度 2610地区 5位

■ロータリー財団表彰バナー 披露

■交換留学生アイシャさんにおこづかいのお渡し

…一言挨拶

幹事報告

■11月ロータリーレート 1\$ = 154円 (10月 149円)

■3番テーブルミーティング 本日⇒万葉 18:30～

■次週 11/13 例会は場所と時間を変更し職場例会を開催致します

< ニコニコBOX 11件 40,000円 >

牧野会長／本日、石井大地様をお迎えして。卓話よろしくお願い致します。

中野副会長／高岡ワインクラブオーナー石井さん。

米山奨学生マリクアイシャさんをお迎えして。

坪田幹事／石井様ようこそ高岡ロータリークラブへ。本日卓話よろしくお願いします。

山岡君／石井さん、本日はよろしくお願いします。

藤田君／この度、富山県功労表彰を伝統工芸高岡銅器協同組合、竹中理事長の推薦をいただき栄えある賞をいただきました。これからもこの賞に恥じない様、業界の発展のため精進してまいります。また、本日

皆出席表彰をいただき感謝です。

竹中君／藤田さん、富山県功労者表彰受賞おめでとうございます。

板谷君／11月2・3日、山岳同好会、グルメ旅行？お世話していただいた皆さん、ありがとうございます。雪のため予定が変更になりましたが、楽しい2日間でした。皆出席祝ありがとうございます。

四津谷君／先週は富山マラソンがあり、今回は修行僧姿で走りました。毎回バカ殿のコスプレの方と競い合うのですが勝ちました。何とか4時間53分男性陣ではアベレージライン。ちなみに出町市長も出場し、5時間43分公務の中、大健闘だと思います。ただ、マラソン前日受付が富山市民体育館工事中のため高岡のテクノドームだったため、高岡イオンとスポーツコアのセールやイベントで大渋滞。おかげで瑞龍寺の拝観客が倍増。マラソンランナー様々でした。

北野君／先月、誕生日祝いありがとうございました。4人の孫が産されました。男の子です。

加藤君／皆出席表彰いただきました。

杉林君／本日、早退いたします。11月8日(土)6番テーブルミーティングです。場所は若鶴大正蔵です。15時42分発、城端線で出発します。城端線ホームまたは現地集合にてお集まりください。

3番テーブルミーティング 11/6 万葉



タカマチ映画祭実行委員会・映画祭発起人

石井大地様

「地方映画祭の力～タカマチ映画祭の挑戦～」

本日は、高岡の名士の皆さまがお集まりの場で、このようにお話をさせていただく機会を頂戴し、心より御礼申し上げます。只今ご紹介にあずかりました、タカマチ映画祭実行委員会・発起人の石井と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

まずは簡単に自己紹介をさせていただきます。東京都出身です。東京では映像ディレクターとして、下積みの頃はテレビドラマ、時代劇、映画の助監督として現場を回り、その後は様々な映像制作の仕事に携わってまいりました。2008年に、両親の生まれ故郷である高岡市に移住し、映像の世界から一転して、ワインの世界に飛び込みました。2012年には「高岡ワイン俱楽部」というワインバーを開業し、バーの営業と並行して、ワイン講座や、ソムリエ資格を目指す方向けの試験対策講座、レストランとのペアリング会などのコラボ企画、さらには「タカマチバル」という食のイベントの主催など、食を通じた街の賑わいづくりにも関わってまいりました。

高岡に移住して最初に感じたのは、「なんて豊かな土地なんだろう」ということでした。自然が身近にあり、食は美味しい、持ち家率や共働き率も全国トップクラス、数字だけ見ると、とても豊かな地域です。しかし、一方で、私自身のお店がある高岡の中心市街地、いわゆる「タカマチ」と呼ばれる繁華街に目を向けると、その豊かさが必ずしも「まちなかの賑わい」にはつながっていない現実が見えてきます。

コロナ前からすでに人通りは減少傾向にありました、コロナ後はさらに人の流れが戻らず、タカマチの夜は、以前にも増して寂しい状況になってしまいました。タカマチで商売をする身として、「このままではいけない。タカマチを、どうにかもう一度、

人が集まる、ワクワクする場所にできないだろうか」そう考えるようになり、商店街組合の活動などにも関わる中で、様々なアイデアを模索してきました。

「タカマチを舞台にした映画祭」というアイデア自体は、今から10年以上前に企画しておりました。当時の名称は「タカマチスナック映画祭」。名前からして、かなりB級路線の、マニアックな企画でした。タカマチのスナックや飲食店、商店街の皆さんにロケ地としてご協力いただき、自主制作映画を撮っているような映像作家の方々に、

タカマチで作品を作ってもらう。そして、全国の映画好き・スナック好きの観光客を呼び込もう、そんな構想でした。ところが、当時の自分には、人脈も経験もまだ足りず、残念ながら、その映画祭は「構想のまま」で終わ

ってしまいました。

その後も、タカマチバルなどイベントは続けていましたが、時代は大きく動きます。

新型コロナウイルスのパンデミックです。飲食業は大きなダメージを受けました。

マスク、外出自粛、人との距離、今まで当たり前だった日常が一変し、「当たり前に人が集まる」ということが、どれほど尊いことだったのかを痛感させられました。この3年間で、人生観が変わったという方も、多くいらっしゃるのではないかでしょうか。

私自身も大きく価値観が変わりました。とりわけ「一番の犠牲者は子どもたちではないか」と感じています。東京に住む私の娘は、高校3年間を、ほとんどマスク越しの学園生活で過ごしました。友達の表情もよく見えず、行事も制限される。そんな姿を見ているうちに、「自分のことよりも、次の世代の子どもたちのために、何かできることはないだろうか」と、強く思うようになりました。

その時、頭に浮かんだのが、かつて構想だけで終わってしまった「映画祭」の企画でした。ただ、今度は10年前のようなB級映画祭ではありません。「地元の子どもたちに、夢を与える映画祭にしよう」と、方向性が大きく変わりました。

こうして、2022年11月、タカマチ映画祭実行委員会を立ち上げることになります。正直なところ、10年前に同じことをやろうとしても、恐らくうまくいかなかったと思います。2010年から2016年まで、高岡商工会議所青年部(YEG)に所属し、様々な事業を通じて、多くの先輩方や仲間と出会いました。この時に築かせていただいた人脈や経験が、今回の映画祭の大きな土台になっています。

2022年11月、最初に声をかけたのは、当時の高岡JC理事長、翌年度の高岡YEG会長、そして高岡伝統産業青年会の会長も務められたデザイナーの羽田さんでした。実行委員長には、株式会社開進堂 代表取締役社長の山崎真さんにお願いし、現在、実行委員会のメンバーは15名。当日のボランティアスタッフも含めると、20名ほどの体制で映画祭を運営しています。映画祭の開催は「2年後の2024年11月」と期日を決め、最初の1年間は、とにかく仲間集めと、「どんな映画祭を目指すのか」の議論に時間をかけました。

そもそも「映画祭」とは何か。大きく分けると、2つのタイプがあります。1つ目は、既存の映画を特集して上映する映画祭。2つ目は、コンペティション形式で作品を募集し、グランプリなどを決める映画祭、カンヌ国際映画祭などが、その代表です。

タカマチ映画祭は、この2つ目の、「コンペティションを中心とした映画祭」です。

では、このコンペティションが中心の映画祭に、どうやって子どもたちを巻き込むか。当時、福井の映画祭のリサーチを通じて「映像ワークショップ」という取り組みを知りました。「それなら、高岡でも子ども向けのワークショップを開き、子どもたち自身に映画を作っても

らおう」こうして生まれたのが、タカマチ映画祭の“柱”となる企画「キッズ映像ワークショップ」です。ここで、タカマチ映画祭の理念と目的を、簡単にご紹介します。「映画を通じて、高岡の魅力を共有すること」「映画をきっかけに、新たな挑戦が生まれること」「高岡が、より活気ある街となることを目指すこと」「県内外からクリエイターや観光客が集まり、地域経済・文化的活性化につなげること」「地元の人々が高岡の魅力を再発見し、「誇れる街だ」と実感できる機会をつくること」この理念を実現するための、大きな柱が2つあります。1つ目が コンペティション。2つ目が キッズ映像ワークショップ です。

コンペティションは現在、2部門で構成されています。「高岡 SNS 部門」は、スマートフォンや SNS 時代ならではの表現で、高岡の魅力を3分未満で切り取ってもらう部門です。市民の皆さんに、高岡の良さを再発見していただきたいという思いがあります。「短編部門」は、20分未満の短編作品を対象にした部門で、将来の映画監督や映像作家の“登竜門”となることを目指しています。そして、このコンペティションを支えてくださるのが、豪華な審査員の皆さんです。そのお一人が、福岡町（現・高岡市）ご出身の映画監督・滝田洋二郎監督です。2008年の映画『おくりびと』では、日本アカデミー賞10冠、さらにはアカデミー賞外国語映画賞を受賞し、日本映画の歴史を塗り替えた監督です。滝田監督は、とてもダンディで気さくな方で、お酒もお好き、そして何より映画愛にあふれた方です。滝田監督からいただいた「続けなければ意味がない」という言葉は、私たちにとっての大きな励ましになっています。

もう一つの柱であり、映画祭の“肝”とも言えるのが、「キッズ映像ワークショップ」です。今年は、高岡市内の小学4年生から中学生まで、12名の子どもたちが参加し、富山県出身の映画監督・坂本欣弘監督の指導のもと、7月から9月にかけて全6回、

企画・撮影・編集までを実践的に学びました。完成した作品は、映画祭の初日、11月22日に、高岡市生涯学習センターホールの大きなスクリーンで上映されます。キッズ映像ワークショップの趣旨は、「手軽に映像を制作する楽しさを体験すること」

「プロのクリエイターとの交流を通じて、貴重な経験を得ること」「クリエイティブな活動を通じて、将来の映像作家・クリエイターを育てる」とあります。そして大きな目標は、「高岡から、第二の滝田監督を輩出すること」です。

ここで、昨年の第1回タカマチ映画祭の実績を、簡単にご報告いたします。まず、予算規模ですが、ホームページの制作費など初期費用も含め、約380万円の事業となりました。富山県の「まちなか活性化応援モデル事業補助金」も活用させていただきました。今年度は、様々な工夫をしながら、200万円台後半の規模におさめる形で運営をしております。

昨年のキッズ映像ワークショップには、10名の子どもたちが参加しました。7月から9月まで全8回、うち撮

影が4日間という、かなり本格的な内容でした。講師陣も大変豪華で、現役で活躍されている映画プロデューサーが3名、さらに、地元・富山出身の若手女性監督・伊林監督にも加わっていただきました。映画祭終了後には、ワークショップに参加した子どもたちと一緒に高岡市長室を表敬訪問し、市長との懇親の機会もいただきました。子どもたちはこの経験を通じて、「ものづくりの楽しさ・大変さ・チームで一つの作品を作り上げる」というチームワーク」「第一線で活躍するプロの話を直接聞くことの刺激」を、それぞれ肌で感じ取ってくれたように思います。また「高岡をテーマにしたシナリオ作り」を通じて、改めて自分たちの住む高岡を見つめ直し、地元の良さを再発見するきっかけにもなりました。コンペティションは、「高岡の魅力 PR 部門」（現在の高岡 SNS 部門）には、富山県内から35作品、「短編ドラマ＆ドキュメンタリー部門」には、全国から120作品、合計で150本を超える応募をいただきました。各部門ごとに入選5作品を選出し、グランプリを競いました。グランプリ受賞者に贈られるトロフィーは、高岡の金属作家・上田剛さんに制作をお願いしました。

映画祭2日間の来場者数は、全てのイベントを合わせて約400名。メイン会場である高岡市生涯学習センターホール（350席）は、残念ながら「半分程度」の入りにとどまりました。まだまだ認知度が低く、「いかに地元・高岡の皆さんに知っていただくか」これが、今後の最大の課題の一つだと感じています。

ここからは、今後の展望についてです。タカマチ映画祭を「持続可能な映画祭」として続けていくためには、お金の問題はもちろん避けて通れません。後援をいただいている高岡市、高岡商工会議所、教育委員会との連携をさらに強めつつ、民間の皆さんからの協賛やご支援もいただきながら、安定的な運営体制を築いていく必要があります。また、認知度を上げていく上では、テレビや新聞などのメディアとの連携も重要ですが、現時点では、なかなか大きく扱っていただけないという現状もあります。

そのためにも、今後は「話題性のある取り組み」が必要だと考えています。そこで、私たちが今、具体的に描いている次の一步が、「高岡で映画を撮る」ということです。

今年のキッズ映像ワークショップの講師を務めてくださっている坂本欣弘監督からは、「今後もタカマチ映画祭に関わりたい」と心強いお言葉をいただき、さらには、「一緒に映画を作りましょう」というご提案までいただきました。このお話をぜひ実現させるべく、来年から2年ほどかけて、一本の作品として形にしていきたい、と考えています。高岡を舞台に、映画制作に挑戦し、「映画祭から映画が生まれる」という流れをつくっていきたい。それが、タカマチ映画祭の次のチャレンジです。最後に、高岡ロータリークラブの皆さんへのご提案・お願いを申し上げます。タカマチ映画祭のキッズ映像ワークショップは、「子どもたちの夢を育てる場」「地域の記憶を映像として残す場」そして、「高岡の未来を担う

人材を育てる場」であると、私たちは考えています。ワークショップをきっかけに、将来クリエイターを目指す子どもたちがきっと出てくるはずです。こうした子どもたちを、高岡ロータリークラブの皆さんと一緒に応援していくなら、これ以上心強いことはありません。

「キッズ映像ワークショップの継続・拡充へのご支援」「子どもたちの活動を支えるためのサポート」

「企業・お店をロケ地としてご協力いただく」など、皆さまのお力添えを賜れればと願っております。

滝田洋二郎監督が、こんな言葉をおっしゃっていました。「自分が撮った映画には、高岡の原風景が生きている」。監督の作品の中には、幼い頃に見た高岡の風景、そこで過ごした時間や人とのつながりが、確かに息づいているのだと思います。同じように、将来、子どもたちが高岡からクリエイターとして羽ばたいていくとき、その作品の根っこには、必ず、自分が育った「高岡の原風景」が流れているはずです。

子どもたちの夢を育むタカマチ映画祭に、タカマチ映画祭の今後の挑戦に、皆さまのあたたかいご支援とご声援を賜れましたら幸いです。本日はご清聴、誠にありがとうございました。

